

かた おか はる きち

片岡 春吉

舶来品を凌駕したセルヂス —尾西毛織物業のパイオニア—



片岡 春吉 (1872 ~ 1924)
津島市天王川公園に立つ片岡春吉像

■セルヂスの国産化に成功

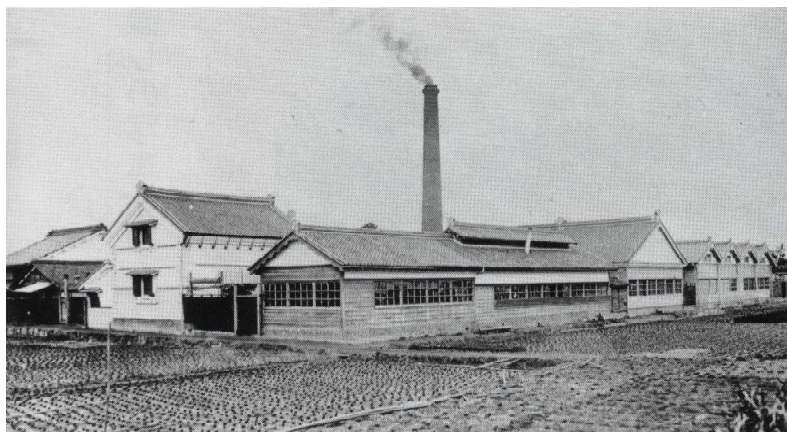
岐阜県養老郡多良村の農家に生まれた片岡春吉は、愛知県海東郡津島町の箴製造業・片岡孫三郎の婿養子となり、竹箴づくりに従事する。しかしその後、春吉は毛織物に可能性を見だし、義父とともに生涯を毛織物業に捧げていく。

機業地を巡歴し、ついで毛織物の需要増で設立されたばかりの東京モスリン紡織に見習い生として勉めた春吉は、買収した製糸工場跡地に、義父とともに毛織物工場を設立する。当初、モスリン(経緯梳毛単糸等の薄地織物、染色加工が容易で捺染等に適した)の生産を試みるも整理・染色工程で挫折し、次に輸入品であったセルヂス(経緯に梳毛糸等を用いた薄地織物、後にセルと言う)の国産化を目指した。

毛織物は製織後の整理が難しく、春吉は器具を自作するなど努力をつづけた結果、1901(明治34)年ごろ、着尺用セルの製造に成功した。1909(明治42)年には、後に主流となる洋服地用の広巾(四巾)織機などを海外から取り入れ、いち早く洋服地の製造を行った。

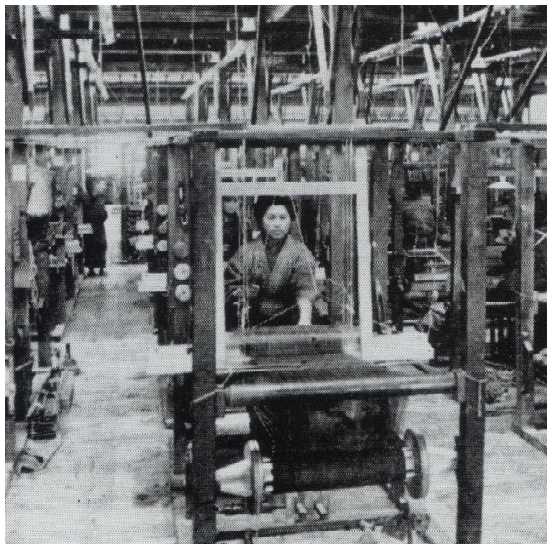
■尾西毛織物業の発展

愛知県西部の尾西地方では、片岡春吉よるセルヂスの製品化を契機とし、一宮市、中島郡、海部郡(1913年に海東郡と海西郡が合併)などで毛織物製造が隆盛する。1935(昭和10)年には、一宮市・中島郡・海部郡・葉栗郡の毛織物生産価額は、全国の過半を占めた。着尺用セル・洋服用セルの二種に限れば、全国生産価額の9割以上が尾西地方で生産されたとみられる。

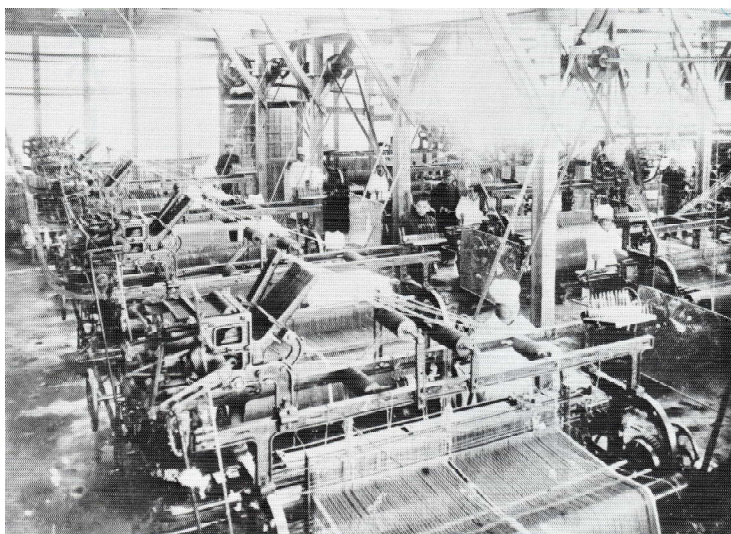


工場外観(大正初期)

出典：『片岡毛織創業九十年史』



「片岡式織機」。春吉はセル(着尺用)の製織にあたり自ら二巾織機(木製)をつくりあげた。出典：『片岡毛織創業九十年史』



工場内部(大正時代)。洋服用地の四巾織機(鉄製)とみられる。

出典：『片岡毛織創業九十年史(二)』

(岩井章真)